

平成二十一年九月一日発行（毎月1回1日発行） 通巻八二六号
昭和二十五年四月三日第三種郵便物認可

火星

平成二十一年九月号



七曜抄 (六)

山尾玉藻

天牛のとんだる空のまだそこに

まみどりの帚木に増ゆ早星

水面しづかや底紅の花のとき

ひとつ灯の愛染明王大夕立

皆なにかしら提げゐたる土用照

盆過ぎの声や巖のうしろより

飛火野の雨に脛ぬれ晩夏なる

懸崖の菊の前なる水溜り

月代の冬瓜畑の傍ゆけり

蓮の実の見ゆるテーブル予約せり

太白星

柳生千枝子

父の日の揃へて重き父の靴
天道虫小さな髭をつけてゐし
風の夜の葉ざくらしのび笑ひせり
時の日の予報快晴港町
初蛙いま置きし鍵見失ふ
広報車ゆき不揃ひな葱坊主
冷奴ひとりの夕餉すぐ終る

杉浦典子

神の田に向く能管の円座かな
五月雨やペン立に入りきらぬペン

宮内庁の立札とんぼ交みをり
双塔に六月の風吹き通る
印押して夫預けきし梅雨夕焼
梅雨晴の校庭まるく使はるる
茄子の花真水両手に運びけり

浜口高子

休日の馬場に現れたる墓
パセリみな食うべ涙のあともなし
青網戸開けほんたうの富士の風
葎切の聞こゆ結界うすぼこり
宝前の豊の光^{てり}や梅雨近し
まほろぼの丹の列柱や植田風
水中花深層水を足しにけり

火星作品

山尾玉藻選

いちまいの石の濡れぐせ墓
明石戸栗末廣

水の斑の幹に揺れぬる更衣

鰻針沈みぬる水明易し

この杜のぐらりと暮るる牛蛙

父の日の夜更けの金魚灯しけり

ひなげしを手折る男のうしろにぬ
大和郡山城 孝子

ビロードのやうな馬の背青葉潮

鑑真に会ひに行く髪洗ひけり

みささぎに鶺鴒のとんでぬる日の盛

東の塔西の塔ある端居かな

せきれいや蓮の浮葉から浮葉
宝塚山本耀子

水貝や舟島陰に入りしまま

樽鷹の苔に花咲く開山忌

草刈の尻大寺へ退りけり
 空梅雨やエプロンはたく占ひ屋
 ついりかな齋堂の棚隙のなく
 麦秋や宿の欄間の眠り猫
 粗壁のはたてよりくる早苗風
 夏炬とも煮炊きの火とも滝見茶屋
 校倉に錠前ふたつ稲の花
 玉苗の暇を来たり開山忌
 かりそめの在所となれり蟾蜍
 まつすぐなこと見えてきし更衣
 二次会の白玉掬ふ祇園かな
 白玉を作るや母の文化鍋
 薬師寺のカーブミラーを白日傘
 僧坊に脱ぐ白靴に日の当たり
 夏草の畦陵を遠くせり
 八幡大山文子
 八幡坂口夫佐子
 神戸深澤
 蟻

選のあとに

山尾 玉藻

父の日の夜更けの金魚灯しけり 戸栗 末廣

「父の日」も更けて何となく淋しさを覚えた作者は、消しであった「金魚」の水槽のライトを点けてみたのだ。なんとも「金魚」迷惑な話である。自分の満たされぬ思いに部外者の「金魚」を巻きこむ行為に、男性特有の子供っぽい我が儘さが垣間見え、そこにちょっとした普遍がある。女性の立場からも大いに納得できる一句である。同時発表のへいちまいの石の濡れぐせ墓も印象的。有無を言わさぬ「墓」の存在が、磐石の今日の濡れざまを鮮やかに再現する。

東の塔西の塔ある端居かな 城 孝子

この「東の塔」「西の塔」とは奈良薬師寺の東塔と西塔であろう。薬師寺辺りの景は誠に懐かしく、双頭のある景は正しく「大和は国のまほろば」の景、日本の原風景と言える。恐らく白鳳の世以来、この地の人々は作者と同じシチュエーションで夕涼みを楽しんできたのだろう。千五百年のスペインを抱え込んだ悠久の世界が漂う一句、大和びと孝子さんの会心の一句である。恒星圏作品へかはほりや重くて軽きケーキの箱も見事な一句。言えそうで言えない中七の措辞で、

ケーキの箱の提げ難さを巧みに表出する。「かはほり」との取り合わせに詩人としての佳きこころの色が滲み出ている。

昼近く汚れてゐたる烏賊釣火 山本 耀子

烏賊釣漁は真闇の海上で夜を徹して行われ、小さな船ではそれを漁師一人で行うと聞く。作者が眼にした烏賊釣船はそのような重労働を終え、今は昼の波に静かに紡われているのだろう。現在の「烏賊釣火」は集魚ランプであるが、作者はその汚れようから漁の過酷さや奮闘ぶりを思っているのである。何気ない景が意外に深いものを語りかけている。

薬師寺のカーブミラーを白日傘 大山 文子

薬師寺の前に大きな道路鏡が立っている。しかし、「薬師寺」と「カーブミラー」は詩の題材として次元を全く異にするもので、下手なマッチングは意図的な印象を生むばかりである。しかし掲句、「白日傘」が絶妙の分量と間合でこの二つを必然的に融合させ、「カーブミラー」に浮かび上がった「白日傘」がまるで白鳳や天平の世から抜け出た女人のようである。机上では決して得られぬ一句である。(以下略)

恒星圈

野澤あき

ゆつくりと日暮きてゐる花十葉
立葵あかし太宰生誕百年祭
百歳になられし衣更へませる
紫陽花は昔を憶ふいろとなり
水無月の昼を明るくして過ごし

戸栗末廣

廣畑忠明

沼尻のもとより濁る花菖蒲
まくなぎの真中にありし歎異抄
父の日の田に連山の水鏡
湧水のまつすぐに来る溝浚へ
子子を覗く論客ばかりなり

栗の花老いたる姉の無表情
夏薊賤ヶ岳より日照雨くる
鐘一つ鳴りてどくだみ咲ける道
木苺は昔のままの甘さなり
虎杖の花廃線の軌道跡

戸田春月

深澤鱻

住吉の南風に押さるる花田牛
肩に背に日の斑を揺らす若楓
夏鶯 柵目の通る主柱
新茶賜たぶ丘の斜面に仔馬跳ね
見たがりし青田の道を極行く

かの戦とは応仁の乱墓の恋
怖がりの太郎もすなる更衣
男山よりの風の風見ゆ更衣
星祭次郎の指の濡れどほし
夕立して駅の高さに余呉湖かな

獅子座

山尾玉藻推薦

川端俊雄

水底のあかるき日なり鑑真忌
襖絵の山河の蒼き鑑真忌
御佛に青葉あかりの連子窓
漣を亀のよぎれる日の盛

松井倫子

ぬか雨の谷の大山蓮華かな
一面の薔薇に蒼める遠比叡
噴き上る泉源いくつほととぎす
緑蔭をはみ出で写生の膝頭

渡辺数子

首だけの大き佛に夏つばめ
声挙げてほつほつ落ちし花ざくろ
花ざくろ噂の彼が素通りす
夏足袋を脱ぎ話したきことひとつ

根本ひろ子

梅雨晴の農小屋にある草箒
睡蓮の次の風待つ木橋かな
火事跡のひるがほに風ありにけり
片蔭の空つぼぼなりし乳母車

奥田順子

麦秋や髪切る音のつづきをり
ためらひつ裸足下りくる箱階段
立葵の曲り角まで躑きゆけり
玉葱の音符のごとく吊られあり

藤原冬人

湿原に夕立近づく匂ひあり
向日葵の影揺すりある風のあり
火の山の夕焼け沼に照りそめぬ
一面のポピー畑より女来る

岩井ひろこ

花蓮と背中合はせの御影堂
水無月や御廟の前の竹箒
山門に親しき顔の揃ひをり
粗壁に沿へる菖蒲の梅雨入かな